



碁どろ

試し読み

# かたなふたふり

—— 続・丁巳ノ事 ——

「下手に我慢すると死ぬぞ」

蓮つ葉な物言いだ。医者はおそろしげなことを言う。兵庫は冷や気を感じたか、押し黙っていた。

「赤ん坊は泣く、患者はいてえ、いてえと訴える。言わねえのは病におつむも毒されてる証拠だ」タチ悪い。

吐き捨てながらも手は忙しい、藤吾がほとんど横抱えにするようにして汗だくで診療所（とはいえ裏長屋だが）に向かうと出前らしい蕎麦を啜っていた。医者は顔を見るや即座に立ち上がり、歯に前歯に葱をつけたまま兵庫の手当を始めた。

「毒消し、と言っていました。こいつ、そのあとしばらくは堪えていたのか歩いていたのですか……」

藤吾はすべてを端折り、急に襲われたこと、何事もないようにしていた兵庫がその後、道中でぼつたりと倒れたことを伝えた。

「どうして襲われた？」

医者は鋭く問う、兵庫の顔を見てすぐさま中毒と察し、てきぱきと手当をしたのだ。隅に追いやられた藤吾は啞然とその様子を見るしかなかった。喉をこじ開け、水を大量に流したと思えば指を突っ込まれ反吐をはかされ、兵庫は苦しうだった。ここでの荒っぽい治療は何度か目になっているが、本道（内科）では初めてだ、自分まで戻しそうになったが自分よりも年下の娘がいやな顔ひとつせず兵庫の背を撫でながら励ます声を掛けているのを見ると踏ん張るよりない。

「わかりません……」首を横に振る。

己の出自が関わっているらしいが、言えない。襲われたのだが、そもそも藤吾は敵を知らない。

「毒は厄介だ。流しちまいてえが、石見銀山でも食っちゃまったじゃあるめエしな」

家で扱われる毒物の誤飲ならば対処できるが、得体知れないものは迂闊に処置できないというだろう、かたりと戸口に気配がして向けば、医者に言われて蕎

麦屋に駆けていった辰蔵が戻っていた。

「俺まで手伝わされたワ……」

布巾を掛けた井を抱え、苦い顔をしている。額を拭う手は赤くなっていた。

「お祖父ちゃん」

「ちったア抜けたか？」

「どうだろ。だいぶん顔色は良くなったけど」

医者は思案顔だが、じいさんと孫娘の顔は気を張りながらも気持ち明るい、それを見ることで藤吾の気持ちも落ち着いてくるようだった。

「べろ出してみる」

力が出ないようだが、顔は赤みが戻り、気も確かなようだ、医者言うことをきちんと聞いている。藤吾はそつと前を過ぎようとする娘に声を掛けた。

「あ。私、が……」

言葉が続かない、前に抱えた金だらいの中身は兵庫からしぼりだしたあれだ。反古紙を被せてはいるが独特の臭いを放っている。

「かのうさまには無理」

娘はにこりと笑うととつと外に出て行く、そのまま頭を壁に打ちつけたくなった。

「痺れ、残ってるだろ」

「……」

兵庫はぼうつと未だ眠りから覚めないような顔で医者を見、藤吾を振り向く。うすく開いた唇が藤吾の名前を呼んだ。

「兵庫」

そのうつろな目が、藤吾にはどこか不安に思えた。ぞわりと首筋をなで上げてくるものを感じる。目を覚ましたのはいいが、耳に入っているのだろうか。寝ていたのを叩き起こされたようなもので、己がどうなったのかも知り得ていないのかもしれない。

医者が何かを言う。飯を中断されたのだの何だのと文句も言うが、傍らには徳利だ、安酒を煽りながら患者を見るとんだ医者だが、腕は確かだ判断も早ければ、臍臍とした兵庫の頬っ面を威勢良く叩き、処置も早い。藤吾はただただぼんやりするしかなかった。脈は悪くないが、冷えがある、食えるなら食って横になれ。

薬はすぐ煎じるから飲んでいけ、いいな？」

「ジジイ」

ひよいと顔を上げて辰蔵を呼ぶ。心得たとばかりに老人は并を差し出した。脇には火鉢があり、鉄瓶が湯気を上げています。

「蕎麦屋に重湯はねえなあ」

「ンダヨ」 団子かよ。

「……」

ほらよ、と兵庫の手元に腕が置かれる。被せた懐紙ならぬ薬包紙を取ればほわりと湯気の立つのが見えた、餡をかけたかした蕎麦掻きだろう。甘辛いような匂いまで鼻に届いてきた。思わずごくりと喉が鳴る、そっぴい飯を食っていないかった。さぞや身に染みることだろう、忝ない、と誰に言うともなく礼を言うと言と辰蔵はへつと笑った。

「…兵庫？」

どうした、腹が減っているだろう？ 屈託のないいつもの表情の欠片も浮かばないではないか、落としたのではあるまいに——。

子供のからだがふらりと揺れて、気付くと藤吾は声を張り上げていた。

「伏せろ！」

ぱらり、とまるで扇子か何か解けて落ちるような音がした、箸だった。逆手に持ち代えられて医者の上すれすれのところを鋭い殺気と共に弧を描いたのは辰蔵が丹念に磨いている外道（外科）手術用の切開器具だった。どこにあったのかは知らないが、兵庫はそれを明らかに武器とし、素早い身のこなしで助けた本人を襲おうとしたのである。

「兵庫！」

戦きと驚きを押しやり、恫喝する。

「その御仁に刃を向けるでない！ 私の恩人だ！」

医者は藤吾の言葉がぴんと来なかったのか、ただひよいと首を竦めるようにしただけで、鬢から解れてこめかみにかかっている髪をそのままに腰を抜かしている。辰蔵は動くことも出来ず、娘がこの場にいないことに藤吾は心から安堵した。

「……」

「しゃんとしろ！ おれはどこにいる？」

土間に狭しと並べられた床几を蹴り倒すようにして板間に進むと音を立てて片足をつく。ぴくり、と兵庫の肩が跳ね上がった。のろりと首を捻り、藤吾を見上げる。

「と、ご、さま……」

短く浅い吐息を繰り返し、生気を失いかけていた目が泳ぐ。道具を持った手が震えていた。

「落ち着け、兵庫」それを離せ。

医者は、そろりそろりと動き徳利を抱くと、二人から離れる。九尺二間の狭さでは限られてはいるが、空いた後ろ手で何かを探るようになっているあたり、何かの用心をしているらしかった。さくらん、と苦々しく呟くのが聞こえた。兵庫に盛られたのは複雑な配合のものだと悟ったらしい。

「…坊主、食べな」

辰蔵が落とした箸を拾い、手ぬぐいで拭いてから差し出す。

「戴くのだ。それから、煎じ薬を飲んで、毒を流せ」

子供は、藤吾の頷くの確かめから道具を落とし、のろりと蕎麦を手繰る。腹が減っていたらしく、もくもくと口を動かしてやがて腕を空にする。藤吾達はほとと息を吐いていた。医者は正気に戻ったのに、辰蔵と藤吾は恐らく『食ったこと』にだろう、己でも判らないのにどうしてか小さい肩を丸めた姿に鼻の奥がつんとした。

「…が、に……」

「あ？」

医者が珍しく気むずかしい顔で薬筆筒を覗いている。それでも徳利は抱えている、割られてはかなわないとでもいいだけだ。

「兵庫が、いたらないばかりに……」

申し訳ありません、と蚊の鳴くような声で兵庫が詫びた。ガキが、と吐き捨てるように言って医者が書いたばかりの紙をその額に貼り付ける。裏紙らしく、薄墨の匂いもたつぷりに貼り付けたそれには藤吾の知らない名の生薬が連ねてあった。最後の孫太郎虫には思わずほう、と息が漏れる。

## 仕掛け錠

一

「おおい！ 待つつくんな」

帯に手挟んだ大小を押さえ、足を踏み出す度に擦り切れた袴の裾が乱れて脛が露わになるのにも構わず、バタバタと草履を鳴らしてすっかり日の落ちた町を駆けつけた。そして船着き場から離れようとしていた猪牙に、裾を絡げて飛び乗る。

「うわっ」

船頭が驚いた声を上げた。グラグラと揺れる船の上で、棹で落ち着かせようとした。

「ちよいと……」

「すまねえな。浅草までやつつくんね」

ふう、と溜め息を吐いて胴の間に座り込む。やれやれだ。丸一日ムダに歩き回っただけで終わってしまった。こんな日には一杯引っかけ、とつと寝てしまおうに限る。ふと、猪牙が進んでいないことに気がついた。

「ああ、店仕舞いだったかえ？ なに、酒手は弾むぞ」

頬かむりをした船頭が逡巡したが、酒手が効いたか小さく「へえ」と頷いて棹を突いた。

夕暮れの大横川を行き交う船を巧みに避けながら、大川に乗り入れる。船頭が櫓に変えて、河口に向かう流れに逆らって斜めに乗り切り始める。

適当な一杯飲み屋に入ってやっていくか。広い川面を渡る寒風が、すうと吹き付けて張りつめた気持ちをやわらげる。火付盗賊改めの与力、窪塚為利は腰に差した煙草入れから煙管を抜くと、刻み煙草を雁首に詰めた。煙草盆を探して胴の間を見回したが、見つからない。

「おい、親父。煙草盆イ置かねエのかえ？」

船頭がすいません、と小さく頭を下げた。

「おいおい、商売つ気がねエなあ」

「……商売船じゃござんせんで」

窪塚がえ？ と船頭を見上げた。声が囁れているので、最初は壮年くらいの男だと思つた。顔を隠すような手ぬぐいと、夕暮れの暗さでよく顔が判らない。だが、体つきや動きから予想より若いように見えた。そして、船頭の法被に見えたのが、実はただの丹前だと判る。

「こいつあ……」

しばし絶句する。まさか……

「ナニ、俺ア鐘ヶ淵だ。どうせ通り道、送りやしよ」

くはは、とおもしろそうに笑つた声も少し囁れていたけれど、悪い感じはしない、と窪塚は思つた。

「こいつあ俺が謝つた。すまねえ」

「構うこっちゃありませんや。小せエが大船に乗つた気でいなせえ」

頬かむりの男がぐい、と櫓を漕ぐと流れに逆らつた猪牙がぐんと速度を上げて進む。荷を乗せた早船や他の猪牙がどんと置いていかれる。びようと耳元で唸り上げる風が、汗を掻いた肌を急激に冷やして気持ち良かった。

ごん、と鈍い音を立てて、猪牙が船着き場に着く。船頭が船着き場の板を踏んで、船を寄せたまま押さえる。

「ありがとよ」

窪塚が懐紙の小さな包みを船頭の懐に落とし込む。

「や、こいつあ……」

「ナニ、黙つて受け取つつくんな。寄り道さした迷惑料だ。こいつで旨いもんでも食いねえ」

ぐらりと揺らさずに、身軽に猪牙から船着き場へ飛んだ。

「すまなかつたな、助かつたぜ」

こりやどうも、と男は頬かむりを取って頭を下げた。薄暮の中で見えた顔は、なかなかの面構えだった。無精ひげとだらしなく延びた月代。そしてたくたの単衣。貧乏長屋に住む男だろう。三十路をいくつか越えた頃だろうか。格好はみすばらしいかもしれない。だが、目が力強く生き生きとしている。櫓を握つた手はこつこつとしていて、職人だろうと思われた。

窪塚は浅草の門前町をぶらぶらと歩きながら、またあの男と会えるだろうか、と思つた。

\*\*\*

再会を思っていたよりも早かった。

それから数月後、薄曇りで、少し風の冷たい日だった。役宅での書類仕事に飽いた窪塚は、口やかましい上司たちの目を盗んで抜け出して来た。幸いなことに擦り切れた単衣に大小を落とし差しにしている。どこから見ても食い詰めた貧乏浪人か冷や飯喰らいと言った格好だ。ぶらりぶらりとそのまま浅草の奥山を歩いていた。

「旦那、その節はどうも」

呼び掛けられて、窪塚は少なからず警戒して振り向いた。職業柄恨みを買う機会が多い。

「おお、船頭さんかえ」

渡し船と間違えて飛び乗った猪牙を操っていた男が、人好きのする笑顔で立っていた。

「はは、船頭は商売じゃありませんよ」

「お前えの名を知らねえからさ」

「俺だって知りませんや」

「そうだったかえ」

そう言つて笑いながら窪塚は、どうだ、と杯を傾ける手付きをする。

「昼からたあ、たまらねえな」

両手を擦り合わせて嬉しそうに笑み崩れるのに、窪塚も思わず一緒になつて笑つてしまった。

「まあ、一杯」

その辺の適当な一杯呑み屋の入れ込みに上がつて、酒と肴を頼むと、鋳師の『泰吉』と名乗った男と二つ、三つと杯だけを交わす。昼時を過ぎて、客もまばらだった。安い酒をゆつくり呑みたいと言つた風の、気楽な隠居や、昼時を逃したらしい商人風の男たちがばらばらと、衝立で仕切つた座敷に座っている。

「旦那あ、どう言つたお人ぞ？」

暫しの沈黙の後、ちびりと杯を舐めた男が、恐る恐る尋ねてくる。

「なんだ、剣呑だな」

正体が知れないと警戒しているのだろう。或いは脛に傷持つせいか。窪塚は相手の戸惑いを感じ取つて、にやりと笑つて見せる。自分でも悪い癖だと思ふ。

危ない状況であるほど、つい笑つてしまふ。同心や与力たちに言わせれば、窪塚が豪胆なせいだと言う。己では意外と小心なのをあざ笑つて出る笑いだと思つているのだが。

こちらがどう思つていようと、その笑いを見た相手は違ふ受け取り方をするよ  
うだ。

「窪塚の旦那……。アンタ、怖えなあ……」

泰吉が、息を呑んでぼそりと呟いた。

「見掛け倒しかもしらんぞ」

ふは、と男が吹き出して、そのままくく、と堪え切れないように笑いを洩らした。

「ただの浪人にやあ、見えねえよ」

「そうか？ どう見ても気楽な冷や飯喰らいだろうに」

「よしつくンナイ」

怖い怖い、と怖気を振るつて見せた泰吉が、ぐい、と窪塚の方に身を寄せると、ぼそりと言つた。

「最前の笑い顔がさ、殺気がイッソ凄まじいや」

何者だえ？ そう問うた男の鋭い目付きも、尋常ではない。そう見た窪塚は、ますます笑みを深くした。鋳師がこんな目をするかヨ。コイツあ、とんだ男の舟に飛び込んだらしい。その笑みを見た泰吉がさつと身を引いた。

「エラく腹の据わつた旦那だヨ」

くわばら、くわばら、と泰吉が恐ろしげに肩を竦めた。

「で？ それを聞いてどうするな」

ちびりと窪塚は杯を舐める。

「どうもしやしねえヨ」

答えた男が窪塚の杯を満たし、手酌で自分の杯にも継ぎ足す。その背が警戒心からか無数のトゲが突き出ているようだ。オヤオヤ、そこまで怯えてくれるかね。

「ま、困つたら助太刀してくンねえ」



## \* お願いとおことわり \*

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: [nedocoya@gmail.com](mailto:nedocoya@gmail.com)

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)